

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05928・19K21094

研究課題名（和文）日本近世都市空間の維持・存続とインフラストラクチャーに関する研究

研究課題名（英文）Research on the Maintenance and Duration of Urban Space and Infrastructure in Early Modern Japan

研究代表者

高橋 元貴（TAKAHASHI, Genki）

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・特任助教

研究者番号：90828344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸・京都・大阪を題材として、都市の基盤施設である広義のインフラ・ストラクチャー（道や堀川、屋敷地、町家など）の維持と存続の歴史的あり様を考察し、その特質を明らかにすることを試みたものである。
具体的には、江戸については江戸城堀および本所深川の堀川の維持管理体制とその存続形態について検討し、京都・大阪についてはインフラの維持管理にかかわる基礎的な史料の収集と整理を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの建築学分野からの都市史研究でも、空間がどのように計画、あるいは形成されてきたのかという観点から分析されてきたのに対し、本研究では都市空間がいかに維持管理されてきたのかという観点からインフラストラクチャーの歴史的な存在形態を明らかにした点で学術的意義をもつ。またこうした成果は持続的な開発目標が目指される現代社会において、歴史的観点から都市空間の今後のありようを考えるうえで重要な社会的意義をもつものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the historical maintenance and duration of urban infrastructures (roads, river, residential areas, townhouses, etc.) in the broad sense, using Edo, Kyoto, and Osaka as subjects, and attempt to clarify the characteristics of these infrastructures. For Edo, I examined the maintenance and management systems of the moat of Edo Castle and rivers at the Honjo Fukagawa, and the forms of their duration. For Kyoto and Osaka, I collected and organized basic historical documents related to the maintenance and management of infrastructure.

研究分野：都市史

キーワード：インフラ 維持と存続 江戸 京都 大阪

1. 研究開始当初の背景

建築史分野からの日本の都市史研究は、70年代後半から80年代にかけて盛んになり、90年代以降には、歴史学・地理学・考古学などの人文系諸分野との研究交流が活発化し、空間と社会とを密接不可分の関係のなかで捉えるという基礎的な方法論が共有されてきた(e.g.高橋・吉田編『日本都市史入門』全3巻、東京大学出版会、1989～91年、高橋・宮本・伊藤・吉田編『図集 日本都市史』東京大学出版会、1993年、伊藤・吉田編『伝統都市』全4巻、東京大学出版会、2009～10年など)。

人文系分野からの都市史研究に対し、工学系分野からの都市史研究の独自性は、建物や土木構造物などの諸施設を分析対象に、都市やその周辺領域を物理的側面から捉えようとする点にある。しかしそれゆえに、都市の形成・発展過程、その計画や開発内容といった形態的かつ可視的な変化に大きな関心がむけられ、都市において物理的な変化に乏しい時期についてはほとんど研究の埒外におかれてきた。そのため、こうした変化が視覚的に把握しにくい時期の都市空間を考察するための研究手法についてもほとんど検討されてこなかった。

上記のような研究状況をふまえ、今後の建築史分野からの都市史研究としてもとめられているのは、都市がどのように開発・形成されてきたのかという局面でなく、都市がいかに維持され(されてこなかった)存続してきたのかという局面に関する歴史的考察といえる。こうした研究をすすめることは、建築史学独自の視点から新たに都市空間を分析するための方法論的視座を具体的なケーススタディからしめすことにもなると考える。

2. 研究の目的

本研究では、都市における人的・物的な基盤となりえる広義のインフラストラクチャー(建築から土木構造物までをふくむ。以下「インフラ」と略す)を素材として、これらの維持と存続をめぐる社会的・空間的な歴史の実態を考察することで、近世都市が有した特質を明らかにすることを目的とする。分析対象は近世中・後期の江戸を中心とするが、京都・大坂の基礎的知見をもあわせることで、本研究の視座や方法論の他地域への敷衍性についても検討を行う。

具体的にはこれまで分析対象とはされてこなかったインフラを維持するための人びとの営み(修復・修繕・管理・監督・建替え・移築など)に着目し、維持管理の仕組みの編成過程やこれを担った地域社会の実態解明とあわせて、当時のインフラそのものが有した空間的な実態を中長期的に復元・把握することを目指す。なお、都市空間を維持と存続からみる本研究の視点は、災害という事象(非常態)を歴史的な特異点としてみるのではなく、平時(常態)からの連続性のなかで捉える試みでもある。人びととインフラとの関係性をひろく歴史的観点から問い直すことは、近年都市史研究のなかでも注目される災害や環境という論点に対しても学術的意義をもつとともに、インフラに高度に支えられた現代都市の存立構造やインフラに対するわたしたちの考え方そのものに批判的まなざしをむけるという点で社会的意義も有すると考える。

3. 研究の方法

本研究では、(1)江戸の個別研究と総合化と(2)京都・大坂の基礎的研究の2つの作業を設定し、それぞれつぎのような方法で研究をすすめた。

(1) 江戸の個別研究と総合化

江戸に関しては、①領域、②小地域、③家屋敷の3つのレベルから検討をすすめた。

①江戸城堀の維持管理体制とその実態を、普請奉行の業務記録である「書上帳」(国立国会図書館所蔵)を分析し検討した。またこれまでの市中における堀川の分析や()の成果もふまえ、江戸全体の堀川の特質を整理し、水系システムの把握と類型化を試みた。

②旧幕府引継書(国立国会図書館所蔵)にふくまれる本所・深川の川浚史料を中心に史料を収集、精査し分析をすすめた。なかでも豎川に注目し、維持管理のありようと堀川の実態を中長期的に復元し、堀川が有する地域的特質を検討した。

③旧四谷塩町一丁目を題材に、江戸東京博物館所蔵史料に残される四谷塩町一丁目史料を調査・収集し、町空間の復元を行うとともに町共同施設の維持管理について検討した。

(2) 京都・大坂の基礎的研究

京都に関しては、京都五条・西橋町にある柏原家に所蔵される史料を素材に検討をすすめた。当初はおおむね目録整理が済み具体的な史料分析に着手することを想定していたが、調査をすすめてゆくなかで新たな史料群が発見された。そのため、具体的な史料分析作業をすすめるための前提作業として新史料群の現状記録調査と目録作成の必要性が生じ、その作業に取り組むこととした。一方、大坂に関しては「町触」(『大阪市史』)を素材に、大坂町奉行所による堀川の維持管理のあり方の検討をすすめた。

上記のほか、本研究の視座に関係する最新の研究動向を論文や書籍などからはひろく収集し、理論的な観点から本研究の方法論の深化を試みた。

4. 研究成果

本研究では主として以下のような成果を得ることができた。

(1) 本所・深川の堀川の維持と存続

旧幕府引継書(国立国会図書館所蔵)にふくまれる本所・深川における堀川の維持管理にかかわる史料を主な素材として、本所・深川の水系構造を整理するとともに、竪川の維持管理の実態を通時的に検討し、主としてつぎのことが明らかになった。

竪川は近世をつうじて幕府によって管理される堀川(公儀浚の対象)のひとつであったが、周辺地域の町人(地主)や船持らによる自主的な管理(自分浚)も断続的に実施され、18世紀初頭から19世紀半ばにかけて計12回ほどの浚渫が行われていた。こうした川浚の実施にもかかわらず、竪川の川幅や濇幅は狭まり、水深については掘削当初(万治2年)の半分ほどにまで浅くなっていた。その要因は本所・深川地域での洪水によって堀川内に土砂を運び込まれたことのほか、毎夏の降水量の増大が堀川への土砂堆積にあり、水面下で生じていた冗長的な堀川の変質が排水機能を低下させ、つぎなる洪水を惹起することにつながっていたと考えられる。

(2) 江戸城堀の類型と維持管理システム

普請奉行の業務記録である「書上帳」をもとに、江戸城堀の維持管理体制を通時的に整理し、その存続形態について分析することで以下のことを解明した。

江戸城堀は城内、内曲輪、外曲輪の三つに区分され、その維持管理は作事奉行・小普請奉行・普請奉行が担った。このうち普請奉行は、城堀そのものと、城堀を構成する石垣・土手・笹などを管掌し、その上に構築される櫓や橋、諸施設に付随する石垣については作事奉行・小普請奉行が管轄した。普請奉行は城堀廻りの毎年3回の定期的な見分と災害時などの臨時的な見分とを実施し、その破損状況を細かく記録することで、城堀の状態を把握し、維持管理の計画、実施を行っていた。

一方、実際の維持管理は市中の請負人によって広汎に担われる者で、その形態は6つの維持管理労働の組み合わせからなるものであった。維持管理体制は享保期後半から徐々に編成され、明和期ころに一応の安定をみるが、近世後期から幕末にかけて幕府による負担を縮減する方向で再編されていった。江戸城堀は、市中の堀川にくらべれば徹底した管理下のもとにあったといえるが、その維持とはかならずしも当初のすがたを保持することを意味せず、破損箇所や堀内の埋り・出州が放置される場合も多々みられた。

(3) 四谷塩町一丁目の空間と上水道施設

江戸東京博物館所蔵の四谷塩町一丁目文書を素材に、幕末～明治初期にかけての町空間の復元を建物レベルから行い、詳細な復元図を作成した。これをもとに江戸のお町屋敷類型の再検討を試み、これまでの3類型(表地借・裏店借型、全戸地借型、表裏店借型)にくわえ、居付地主型を措定する必要があることを指摘した。

また東京都公文書館に所蔵される明治初期のインフラ修繕に関する東京府宛の願書を分析することで、近世において四谷塩町でも使用されていた玉川上水が、近代初頭に町住民によって自主的に運営、再編されるかたちで利用されていたことを明らかにした。この点は、近世に構築された上水道システムが単純に継承されたわけではなく、少なからぬ再編や改造をもって明治期へと受け継がれていったことを意味している。その意味で、インフラの維持と存続という視点は、江戸・東京の近代移行期を考えるうえで今後重要な論点たり得ると考える。

(4) 京都・大坂の基礎的研究

先述したように京都柏原家文書の分析に関しては、調査をすすめてゆくなかで新たな史料群が発見されたため、現状記録調査と目録作成作業に注力することとなり、具体的な分析作業には着手できず、また大坂での新たな史料調査もすすめることができなかった。さらに、Covid-19の影響により、補助期間(令和2・3年度)を通じても出張をとまなう史料調査がほぼ実施できなかったこともあり、本研究の目的のひとつとしていた京都・大坂との比較史的考察は今後の課題として残されるかたちとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋元貴 | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 屋敷割、土地所有のその利用形態 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『四谷一丁目遺跡』第3分冊、文献調査編 | 6. 最初と最後の頁 10-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋元貴 | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 近代移行期の四谷塩町一丁目の社会と空間 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『四谷一丁目遺跡』第3分冊、文献調査編 | 6. 最初と最後の頁 42-58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 高橋元貴 | 4. 巻 1734 |
| 2. 論文標題 都市をつくらふこと | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『建築雑誌』 | 6. 最初と最後の頁 35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 高橋元貴 | 4. 巻 73 |
| 2. 論文標題 新刊紹介 小寺武久著『都市・建築空間の史的研究』 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『建築史学』 | 6. 最初と最後の頁 146-148 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Genki TAKAHASHI |
| 2. 発表標題 The Spatial Dynamics of Canals in the Eastern Lowland Area of Edo : Dredging, Silting and Flooding |
| 3. 学会等名 International Symposium: The Ordinary and the Extraordinary in the Early Modern Metropolis: Canal, River and Flood, National Institute of Japanese Literature (招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 高橋 元貴 |
| 2. 発表標題 江戸城堀の空間構造と存続形態 |
| 3. 学会等名 都市史学会、内湾研WG (招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 高橋 元貴 |
| 2. 発表標題 コメント：都市空間の肌理をいかに描くか |
| 3. 学会等名 日本建築学会建築歴史・意匠委員会都市史小委員会シンポジウム、シリーズ「都市空間の物質性」第1回「都市・建築と物質のあいだ」 (招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 渡辺浩一、マシュー・デーヴィス | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 240 |
| 3. 書名 近世都市の常態と非常態 | |

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 高橋 元貴 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 東京大学出版会 | 5. 総ページ数 400 |
| 3. 書名 江戸町人地の空間史 | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 都市史学会 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 688 |
| 3. 書名 日本都市史・建築史事典 | |

| | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 「都市の危機と再生」研究会 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 吉川弘文館 | 5. 総ページ数 406 |
| 3. 書名 危機の都市史 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|